ボン・サンスの教育論と理性の哲学*
——ルソーの『エミール』について——

紺　田　千登史**

第二部　ボン・サンスの心理的、発生的記述

第二節　発達の各段階におけるボン・サンスの教育—自愛の教育からはじめて共生の教育へ

いうまでもないことかもしれないがここでボン・サンスの教育というのはベルクソンが述べているような意味、すなわち「他のある人たちなら自然によってただちに置かれているようなところ」[1]にまで人為的な手段をもちいて一定の人たちを導いていく、というような意味ではない。すなわち出来合いのこわばった観念によってすっかり絡め取られてしまっている「習慣的精神」[2]にもういちどその本来の自然な柔軟性を取り戻させるために講じられる方策というような意味ではけっしてないということである。ルソーがみずからの課題としているところはむしろ逆であって、それは最初からできるだけ人為を避けて子どもにほんらい生得の可能性として与えられているはずのボン・サンスの芽をいかに育てていくかを探ることにある。ベルクソンにならった言い方をするなら、それは人間がそもそも自然によってただちに置かれているようなところをできるだけ離れないようにしながら子どもを育てていこうとすればどのようなやり方がいちばん適当なのかを探ることである、ということもできよう。ルソーは語っている、「われわれは生まれながらにして感性をそなえている。そして生まれたとたんから、自分をとりまいている事物によって、いろいろなふうに刺激される。自分の感覚をいわば意識するようになるやいなや、まず第一には、その感覚がわれわれにとって、快いものであるか、あるいは不快なものであるかによって、次にはそれらの感覚を引き起こす事物がわれわれに適合しているか、あるいは適合していないかによって、そして最後には、理性がわれわれに与える幸福や完全という観念に基づいて、われわれがそれらの事物をどのように判断するかに従って、その感覚を生じさせる事物を求めたり、避けたりするようになる。このような傾向は、われわれの感覚が発達し、分別がついてくるにしたがって、ますます助長され、堅固になってくる。しかし、それらはわれわれのよくない習慣によって束縛され、またわれわれの誤った考えによって、多かれ少なかれ変質してくる。このような変質をする前の本来の傾向こそ、われわれのなかにおいてわたしが自然と名づけるところのものなのだ」[3]と。もっとも、ルソーがこのように語るからといって自然が習慣とはまったく隔絶したところに置かれるのではない。いな、ルソーはむしろ教育とは子どもに一定の習慣を身につけさせることだとする一般に受け容れられてきた考え方を積極的に承認しさえするのである。ただルソーが問題とするのはそのさい習慣と自然のうちいずれが主導権を取るのかという点である。もしも人為としての習慣が主導権を取るというのならそれはもとよりルソーにとっては問題にならない。ルソーはうえの文章を書くすぐまえのとこ

*キーワード：自然、習慣、教育
**関西学院大学社会学部教授
1) H. Bergson, *Ecrits et paroles I.* p. 85
2) Ibid. p. 87
3) Pl. IV. *Emile*, p. 248